

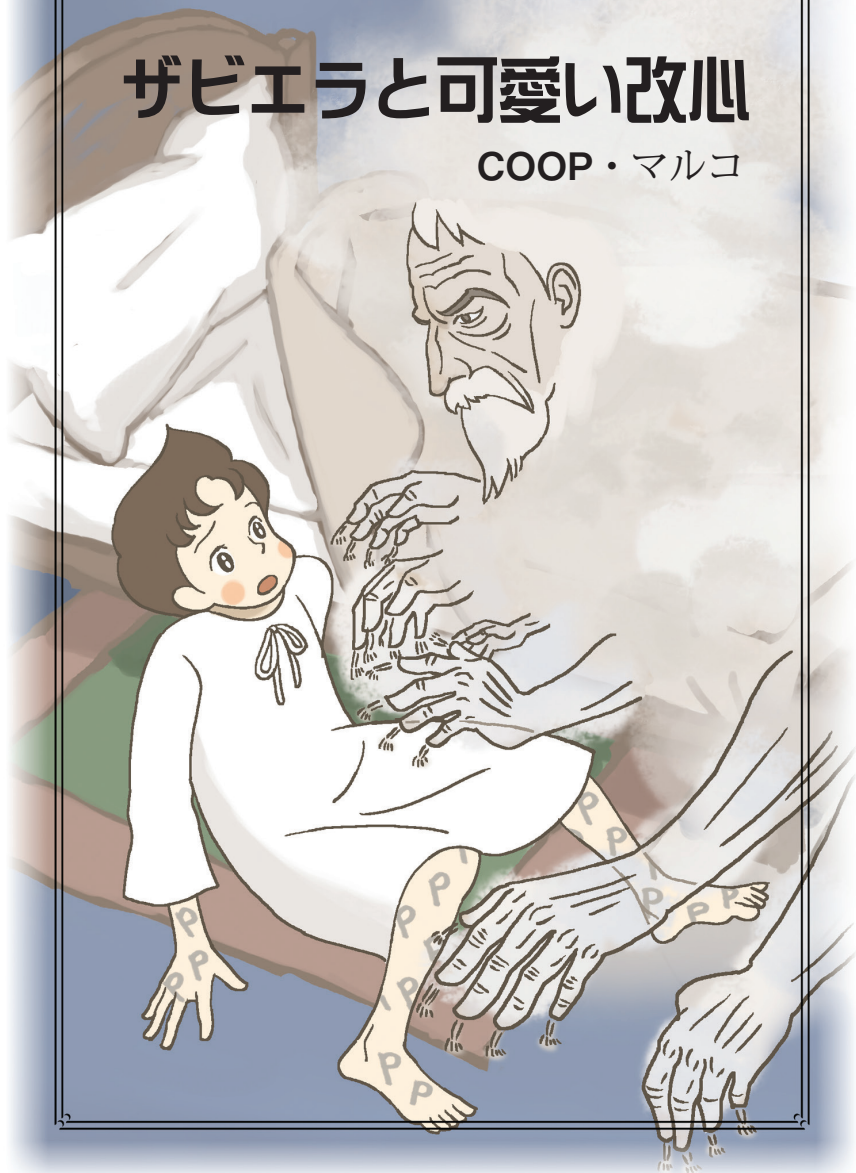
ザビエラと可愛い改心

COOP・マルコ



ザビエラと可愛い改心

COOP・マルコ



装幀・イラスト 溝上なおこ

■目次

1	恐怖の子供部屋	5
2	フィランジェ村	7
3	少年サハネマ	8
4	村の子供たち	14
5	セザール神父と小さな懺悔	16
6	オルレアン・ポナパルト村長	19
7	呪術師イバラとつかの間のお母さん	25
8	妖怪ザビエラ	32
9	改心のサハネマ	38
10	ささやかなピクニック	41
	著者からのあいさつ	48

1 恐怖の子供部屋

「馬鹿！ みんな嫌いだ！」少年は、両親にそう言いすてると、逃げるように自分の小部屋に向かって去って行った。

ホルステ・ケルンという名の、一人っ子で十歳のこの少年は、表面上は明るく無邪気な反面、ふつうのありふれた子供たちと同じく我がままでもあり、その上、起こしたいざこざで、たとえ自分が悪いと分かっているでもその非を認めない意地悪な面もあった。

それが元で、今日も両親と口ゲンカくちをしてしまい、困り果てた両親の心の内も分かろうとせず、二人をののしり、それを尻目に自分の部屋へと駆け込んでそのまま眠り込んでしまった。

九月も中ごろに近いというのに、その晩はやけにむし暑く、真夜中になると、ホルステは寝間着ねまきもまとわずにベッドの上ですやすやと眠りこけていた。

ところが、その三十分後、何と少年は悶絶もんぜつ地獄の頂点に達していた。

「やめて、くすぐったい！ 誰か助けて！ ククスヒヒヒフフフハハハ……！ ああやめて！ やめてくれーっ！」あろうことか、ホルステは得体の知れないも

のに制裁を加えられているのである。

叫んでも実際には声が出ず、身動きが出来ない魔法をかけられて手足をつかまれ、足の裏、腋わきの下、わき腹を、通常の数倍のこそばゆさを繰くり出してくすぐり責めにされ、口からはよだれが水飴入りの雨だれのようにこぼれ落ち、眼からは涙が滝のごとくほとぼしり出て、苦悶はもう限界を越えていた。

「ヒューヤーツハハハハハッ！ フフファーキキクククファーツハハハ、何でもします！ もう許して下さい、すぐに謝あやまって来ますからもうやめてっ！」

その数分後、ホルステの両親は、涙を流してあわただしく必死に謝罪をせがみ乞うわが子をただ々驚きながらあやし、不思議に思いつつも安心して抱きしめていた。

そのあと、少年をくすぐり責めにした怪物は子供部屋を後あとにして、外へとフワッとどこともなくさまよい出て行ってしまった。

部屋の中の机の上にある勉強用紙には、子供にしか見えない魔法の字でこう記しるされてあった。「幼稚な童どうじ子よ、親への感謝と自己の反省の心を忘れるでないぞ！ もしそれを忘れて、この制裁の内容を他人にもらすことがあれば、再び呪われたくすぐりの鞭むちがお前の体にとぶであらう……」

2 フィランジェ村

昨夜のえげつない悪夢など、柄がらにもない嘘うそだったかの
ように涼すずしい朝が訪すれていた。澄みわたった青空が果て
しなく広がって、太陽が、遠くのぞに臨ぞむアルプスの銀嶺ぎんれいを
ばら色に染めている。

ここは、二十世紀初頭のフランス国境に近いイタリア
の小さな村フィランジェ。ほとんど酪農らくのうでもっているが、
小規模ながら混合農業も兼かね、ぶどう畑が広がっている
豊かではないが貧しすぎることもない、のどかで落ちつ
いた村だ。

住人は、地元の人々に、イタリア王国統一後にスイス、
フランスから移住して来た人々が加わり、村人の会話の
中で今も片言のドイツ語、フランス語が飛び交っていた。

祭日には、村の特有の行事、ブリオッシュの早食い競
争というのがあり、多くの村人はベルモットでのどを湿
らせた後あとで、大おおっぴらにその宴うたげに興じていた。〈ベルモッ
ト：ぶどう酒に薬草木の根、皮などのハーブをしみ込ませ
たりキュール〉

子供たちは子供同士で、アルペン・ダンスもよおの催しを行
い、男の子も女の子も、照れくさそうにしながらお互い
の相手を選び、なじみながになっている流しの若いアコー

ディオンの弾きの軽快な演奏にのって明るく踊り戯^{たわむ}れていた。

村の特産物である、山羊^{やぎ}の乳で作ったアルプ・チーズは、高原の牧場^{まきば}の草花に加え、地中海地方から時々手に入るオリーブの実を飼料に混ぜていた。この地の物は評判が高く、いい時は高く売れた。

村の中心あたりにある小さな教会堂は、毎日朝、昼、夕に、時に物悲しげな幻想を帯びた鐘^{ねいろ}の音色の調べを周囲一体にひびかせ、そこにいる人々に瞑想^{めいそう}の時間を与える最高の建造物であった。

遥^{はる}かとはいえない程度に、遠くそびえる山々の頂^{いただき}に昇った太陽と共に、今日も一日が始まろうとしていた。

3 少年サハネマ

「ボネロ、まったく僕、悲劇だよ」

二人の少年が、オリーブの塩づけをかじりながら朝日の陽差しの中を歩いて来る。

二人とも同い年の八歳で、話しているほうの小柄でブルネット、つまりこげ茶色の髪の子は、名をサハネマ・パオロッチィといった。肌は色白、目は大きく黒目がちな、穏^{おだ}やかながら生氣盛んな輝きを放つ瞳を持ち、器量

